



胡錦濤・中国国家副主席 記者会見

1998年4月24日

この会見は若きリーダー胡錦濤氏の国際舞台へのデビューモードもあった。品行方正を感じさせるという表現が妥当かどうかは別にして、穩当で誠実な発言が目立った。が、副主席選出の経緯についての質問には毅然とした答えが返ってきた。

© 日本記者クラブ

斎田一路理事（司会 共同） きょうのゲストは、中国の胡錦濤副主席であります。ちょうど20年前の1978年に、当時の副首相として鄧小平さんが日本においてになり、この日本記者クラブで、いわゆる欧米流の記者会見を初めてされた。

あれから20年経過して、今回、若いリーダーとして期待されている胡錦濤さんが、国際的に開かれた場で初めての記者会見にのぞまれているわけです。

この後、新幹線で京都の方に行かれるということで、非常に時間が限られています。略歴などの紹介も省かせていただきます。

壇上の方々のお名前だけ紹介します。

中央は、もちろん胡錦濤副主席であります。それから、こちらが徐敦信大使であります。

会場のみなさんからみて一番左側になりますが、中国共産党中央对外連絡部長の戴秉国さんです。副主席の隣は通訳を務めていただきます中国大使館の王効賢一等書記官であります。

それでは、最初に副主席から一言いただきまして、その後、質問を受けたいと思っています。よろしくお願ひをいたします。

胡錦濤 皆さん、本日、こうして集まつていただきありがとうございます。皆さんと協力して進めていきたいと思います。

ことしは、中日平和友好条約締結20周年です。両国政府、また両国民がともに記念すべきこの年に、日本政府のお招きに応じてお国を公式訪問するために、私は来日いたしました。この機会をおかりしまして、まず中国人民の日本国民に対する温かい、親しいごあいさつと祝意をお伝えいたしたいと思います。

ここ数日来、私は日本政府、また各政党の方々、各界の友人の方々と広くおつき合いをいたしまして、深く突っ込んだ意見交換を行いました。一連の大きな問題につきまして、日本の方々と共に認識を得ることができましたし、相互理解の増進、友情の増進、信頼の増進、さらに協力の促進の目的を達成できたと思います。

まだ私の訪問日程は終わっておりませんけれども、訪問の成果については、私は十分満足をいたしております。

日本の多くのマスコミの方々は、長きにわたって両国関係の発展、両国民の友好の増進のためにたゆまぬ努力を払われ、大きな成果をおさめました。ここに皆さま方に、また皆さま方を通じまして、すべての、中日友好協力関係の発展に关心を持ち、また大きく努力をしていただいた方々に心から敬意を表したいと思います。時間の関係でこれ以上はお話を控えさせていただきます。

それでは、質問をどうぞお願ひいたします。

田畠（TBS出身） 以前は記者でしたが、いまは大学で教えています。

中国の国家副主席というのは、大体ご老人のポストでした。今回、非常に若い副主席が生まれましたことは、まあ、お国のことですけれども、非常にいいことだと思っています。

胡錦濤さんは共産党の仕事をされていた期間が長くて、中央政府の部長とか主任とか、そういうポストにつかれたことはありません。そういう人が突然、国家副主席になりましたので驚いてもあります。

そこでうかがいますが、3月の人民代表大会で胡錦濤さんが国家副主席の候補者になるということは、一体いつ、どういう場で、ど

ういうように決まったんでしょうか。あなたが自分で立候補したんですか、それともだれかがあなたを指名するか、推薦したんでしょうか。

胡錦濤 まず説明しておきたいのは、中国の国家副主席は、若い人にせよ、あるいは年とった人にせよ、憲法によると、その職務自体は変わりなく、同じものであります。

また、選挙のプロセスにつきましては、中国の憲法によれば、中国共産党、また各民主党派、さらに無党派の広範な人々が一緒に集まって十分協議をし、その人選を決めることになっております。

この人選が決められたら、さらに全国人民代表大会の主席団に提出して審議を受けて、それも通過できたら、全国人民代表大会の総会に提出して認可をもらえれば、それで成立了します。最後には、総会で無記名の投票で誕生することになっております。

率直にいって、私は一回も自分が国家副主席になることは、あるいはなりたいことは思っていませんでした。

第9回全人代の第1次会議で私が選出されたときに、これはすべての全人代の代表、また全国民の私に対する信頼である、というふうに受けとめました。

私としては、これから真剣かつ厳格に憲法を守り、職務の遂行に全力を尽くして廉潔なイメージを保ち、誠心誠意をもって全国民のために奉仕していきたいと考えております。

中国と全世界のすべての国々の人々との友好関係を促進していきたいと思います。

全国民からの厚い信頼に恥ないように、頑張っていきたいと思います。

伊藤（共同） 昨年秋の米中首脳会談では、両国間に戦略的パートナーシップを構築するということで合意した、と発表されました。それ以前にもフランスと、それからロシアとの間でも同様のコミュニケーションが発表されています。副主席が日本においてになって各界の人士とお話になって、日中関係は非常に順調に発展しているというふうに思われているでしょうけれども、いまだに日中関係は戦略的パートナーというふうにはなっておりません。その理由について、副主席はどのようにお考えでしょうか。何か障害があるのでしょうか。

胡錦濤 まさにいまお話がありましたように、中日国交正常化が実現されて以来、中日関係は、各分野において全面的に大きな発展を遂げました。交流も日増しに拡大されつつあります。

これは中日両国人民に実際の利益をたくさんもたらしたばかりでなく、アジアないし世界の平和と発展、繁栄にも直接貢献をいたしております。中日関係の発展については、全体として我々は満足をしております。

ことしは中日平和友好条約締結20周年です。秋に中国の国家主席江澤民がお国を公式訪問することになっております。これは中国の国家主席の初めての日本訪問であります。この歴史的意義を持つ訪問が、必ず中日両国の関係をさらに新たな段階に推し進めることができると信じております。

確かに現在の国際情勢の中でどういうような中日関係を構築していくかは、我々両国の根本的利益にかかわるだけでなく、アジアないし世界の平和と繁栄にも直接つながることであります。

我々両国の政府、また政治家、いずれもがともに戦略的立場から中日関係をみきわめ、

また対処しなければならないと思います。チャンスをつかみ、大局の見地から、また歴史を教訓とし、未来に向けて21世紀の中日関係の枠を、これから構築していかなければならぬと思います。これでもって世々代々にわたる友好を実現させていく必要があると思います。

中国共産党、また新しい政府は、今後とも中日の善隣友好関係の発展に積極的な態度で臨んでいきたいと考えております。日本政府、また各政党の皆さんと一緒に、中日関係をさらに全面的かつ深く推進していきたいと思います。この面においては中国側としては何ら障害がありません。

木下（朝日） アメリカのレスター・ブラウン博士が、中国の水資源問題、水利問題について警告を発しました。博士はかつて中国の食糧が21世紀に危機に陥るであろう、という警告の本を発表したことがあります。今回、博士は、水が危機に陥るという問題からさらに中国の食糧危機を予言しております。

これについて副主席はどうお答えになるか。博士の指摘が事実か否かは別として、こういった水資源の問題、それから農業技術の問題などで、日本と協力を深めていくというか、日本に協力を求めていくお考えがあるかどうか。

胡錦濤 ブラウン博士は、学問の深い専門家です。しかし、率直にいって私は彼の結論には賛成できません。中国は確かに水資源の不足している国です。私は水利を専門とした経験もあるので、普通の人よりよく分かっております。

中国は非常に多くの人口を抱えております。12億の人の食事の問題を解決するとい

うことは、確かに我々が重要視しなければならないものです。

ただ、中国の水資源の現状とイスラエルの水資源の現状とを比較してみれば、中国のこの問題を解決していく見通しについて、幾らか自信がつくのではないかと思います。

現在でも中国としてはすでに対処しており、今後とも水資源の保護、また活用について一連の政策をとっていくことになっております。

例えば水資源法を制定しております。多くの大型あるいは中型、小型の蓄水工事もやってあります。さらに水と土壤の保持についての仕事を力強く推進しております。科学技術の成果を活用して、水を節約できる農業を興してあります。全国民に水資源についての教育をし、国民の皆さんに説明し、水を節約する考え方を強化しております。

もちろん、これからもいろいろな問題にぶつかっていくと思います。しかし、これらの問題の解決については、私たちは十分自信を持っております。

食糧の問題については、中国では古くから「民は食を天とする」という言い方があります。幾ら偉い人でも、どんなヒーローでも、お腹をいっぱい食べないと何もできないのです。したがって、我々は農業を国民経済の第1位に位置づけております。

また、一連の農業発展を促進していく強力な措置をとってまいりました。家庭請負責任制を安定させ、農民の意欲をさらに引き出すことに努めております。農業あるいは水利施設のインフラ整備のための資金等をふやしております。また、科学技術の役割を活用しております。一連のこういう措置の結果、ここ数年来、連続して中国の食糧は豊作でありま

した。現在、中国の食糧の貯蓄は史上最高の水準になっております。

アジアの隣国でもし食糧についての需要があれば、我々は互恵の原則のもとで十分提供することができます。

今後とも我々はこれまでどおり農業を重要視し、食糧の生産について、さらに力を入れていきたいと思います。

加藤（ＮＨＫ）　中国の共産党と日本共産党は文革以来、断絶の時代が続いてきました。それが最近、改善の兆しがみられます。今回も不破書記長と少しお話をされたわけですが、双方の共産党の間に何か関係改善の進展がみられましたでしょうか。

胡錦濤　中国共産党と日本共産党は、かつて長きにわたって友好往来の歴史がありました。その後、中断の歴史もありました。近年、両党の関係においては一部の積極的な兆しが出てきています。

一昨日、小渕外務大臣が主催し、日本の各政党の方々、また各界、友人の方々が参加した歓迎レセプションの席で、私は日本共産党の指導者の一人とお会いしました。

私の考えとしては、両党がともに前向きな態度で、また中日友好の大局の見地から、独立自主、完全平等、相互尊重、また相互内政不干渉の諸原則のもとで努力していくれば、両党の関係正常化の実現は可能なことです。

董沢（日経出身）　中国にとって日本はどういう点で重要でございましょうか。また、中国にとってアメリカはどういう点で重要でありますか。そして、中国にとって日本とアメリカ、どちらがより重要でありますか。

というのは、昨年、中国のある首脳がアメリカで「戦争中、アメリカと中国は協力して日本と戦ったじゃないか」という発言をされたのです。で、私は、戦後50年以上もたって、そんなことを中国の首脳が発言するというのは非常によろしくないと思ったんですね。そういうことがあっていまの質問が出たわけです。

胡錦濤　アメリカは世界の一番大きな先進国で、中国は一番大きな発展途上国です。中米関係を発展させることは、中米両国民にとって有利であるばかりではなく、全世界の平和と繁栄にとっても有利なことです。したがいまして、すべての世界の平和と安定を維持したい方々は、いずれも中米関係の安定と発展を支持し、歓迎してくれるのではないかと思います。

一方、別の立場からみれば、中日両国はともにアジアにあって、いずれも影響力のある国であります。また、両国は地理的に近いし、悠久なる歴史的文化的つながりがあります。政治的にはたくさんの共通利益がありますし、経済的にも大きな補完性を持っております。

当面の国際情勢の中では、中日両国の善隣友好関係を発展させていくことの影響は、決して普通の二国間に制限されるものではなく、全地域または全世界にとっても両国の友好関係の影響というものが非常に大きいと思います。ですから、アジア太平洋地域の安定と繁栄を期待する人であれば、当然、中日関係の発展と安定を歓迎すべきだと思います。

私の考えとしては、中米、中日、あるいは日米、それぞれが二国間関係を推進していくときに、いずれも第三国を対象とすべきではないと思います。いずれも第三国に向けるものであるべきではないと思います。こういう高い立場から問題をみきわめていくことによ

って新しい世紀の平和、安定と繁栄が初めて保たれると思います。ありがとうございます。

干青（人民日報）これまで中国の指導者が日本を訪問し、ここで会見するときは、大体日本人の記者と中国人の記者に交互に質問するチャンスをえていただいたんですけども、きょうは特に日本人の記者を優先して、最後になってやっと中国人記者の番になりました。

胡錦濤 すみません……。最後になってしまいまして……。

干青 わりと気軽な問題をお聞きしたいと思います。13年前に副主席は日本を訪問されてあります。このたび13年ぶりに日本に来て、日本の変化について一番印象深かったことは何であったか。それを教えていただければと思います。

胡錦濤 13年前、私は青年代表団の団長として来日したことがあります。当時は、日本政府、また各界の青年の方々から非常に温かい歓待をえていただきました。たくさんの忘がたい美しい思い出をつくることができました。

13年たちまして、再びまた日本を訪問するチャンスに恵まれました。私の印象はといいますと、3点あります。

まず第1点です。今回参りまして、日本政府、また政界の各党派の皆さん、衆参両院の議長、さらに各界の友人の方々と幅広く接触をいたしました。皆さんたちの間では、自分の国をどういうふうに治めていくかということについては、あるいは考え方の食い違いがあるかもしれません。けれども、中日の友好関係を推進していくということについては、

私の接触した感想としては一致しているという印象がありました。

したがいまして、中日友好を発展させることは、本当に人心に深くしみ込んでいることであり、みんなの願望の赴くところあります。中日友好を発展していくためには、日本において広範かつ確固たる基礎があるよう思います。

第2ですが、今回いろいろなインフラ施設とかを見ました。アクアラインの見学もしましたし、ある農民の方の家へもお邪魔いたしました。

日本経済は、いまそんなに景気がよくないようにいわれますけれども、十何年ぶりにまた参りまして、日本の経済発展、また科学技術の進歩の成果については、非常に印象深かったものがありました。

私たちとしては、やはり日本との経済協力をさらに強化し、日本のすべての進んだいいものを勉強していきたいと思っています。

第3点目ですが、このたびの訪問で本当に各方面の方々から温かい歓待をえていただきました。この身で日本国民の中国に対する温かい感情を感じ取ることができました。

貴国に来るときには、私は中国人民の日本人民に対する友情を持ってまいりましたけれども、数日後、私が訪問を終えて帰国の途につくときには、必ず日本国民の方々の友情を持って帰ることができます。

日本国発展、日本経済の繁栄、国民のご多幸を心からお祈り申しあげます。また、中日両国の友好関係の世々代々にわたる発展を心からお祈りします。どうもありがとうございます。（拍手）

文責・編集部